

書評

坂井祐円 著

『仏教からケアを考える』

(法蔵館, 2015)

龍谷大学
吾勝常行

1 はじめに一著者の意図—

仏教とケア。なぜ仏教とケアなのか。「ケアという言葉は日常的である。しかし、仏教という言葉は日常的とは言えない」(p.308)。考えてみれば、奇妙な組み合わせである。この組み合わせに違和感を覚える読者は少なくないだろう。私もその一人であった。『仏教からケアを考える』、このようなタイトルの本が世に出るとは、5年前には想像だにできなかった。そこで本書を手にしたとき、私はまず著者はどのような意図で、どのような背景をもって本書を執筆するに至ったのかを知りたくなった。

著者はお坊さんであり、スクールカウンセラーも務めておられる。大学院で仏教学を修了し、博士（教育学）、臨床心理士を取得しておられる。本書は、京都大学大学院より学位授与された博士論文に手を加えられたものだという(p.310)。本書の「あとがき」冒頭は、次のような言葉ではじまる。

学生の頃、「喫茶店でコーヒーを飲みながら、お念仏を称える」としたら、とても違和感があるよね、と友人が笑いながら話したことがあった。…（中略）…でも、振り返ってみると、この違和感はどこから来るのだろうか。なんとなく笑い話としてしか語れなかったのはなぜなの

だろう (p.307)。

友人との会話を通して覚えた違和感。いわば著者自らの中に芽生えた問題意識に正面から向き合い、あたため、多面的な学識と経験の積み重ねにより執筆したものが本書ということになる。

一般的に仏教と聞けば、お葬式のイメージが根強くまわりついているのがこの国の現状のようである。また、歴史的に僧侶もその葬儀の執行者として関わってきた。仏教とケアの違いは、死者と生者の違いとなる。だから、日常的に使われるケアの場に僧侶が関わることは、その援助対象が異なり、場違いのように感じてしまう。

ところが、本書は、2011年3月11日に起きた東日本大震災を執筆の背景としている。読者の誰もが大きく心揺さぶられたことであろう。被災地に思いを寄せ、支援すべく現地に赴き、あるいは祈らずにはおれない現状がある。未曾有の被害を目の当たりにして、著者は「供養」という営みに注目する。「死者の魂が安らかであってほしい」という祈りにも似た感覚に突き動かされ、私たちはそれまで忘れていた“死のリアリティ”を共有することになったのではないか。続けて著者は、以下のように示唆している。

しかも供養は、生者から死者へと向けられるだけにとどまらない。死の向こう側に関かれた者は、死者からの“呼びかけ”を聞き届けて、生き方そのものが転換する。震災復興ボランティアを続ける人々がしばしば口にする「亡くなられた方々のいのちの叫びが自分を突き動かすのだ」という言葉。この言葉には、ケアの営みが死者によって支えられている現実が、はっきりと示されている。死者を供養する営みは、反転して、死者との協同を生み出し、生そのものが問い直されてくる。死者が生者のいのちに共鳴し、生者を覚醒へと導くリレーションのはたら

きを織りなす。東日本大震災を経験した私たちにとって、「死者からケアされている」という現実、確かな実感となっている (p.280)。

僧侶が専門としてきた供養のみではなく、震災復興ボランティア等をも含め、ここには「供養」というキーワードが、本来の「人としての営み」として表現されている。本書の帯には、「わたしたちは、死者からケアされている」とあり、そのキャッチコピーに驚かされた読者も多いだろう。しかし、本来的な営みに気づきはじめて私たちにとって、供養の営みを介して、『仏教からケアを考える』というタイトルに興味関心を抱く読者は少なくないと思う。本書には豊かな示唆が含まれている。その意味では、本書は著者自らの問題提起にとどまらず、現在の日本社会が抱える対人援助の課題に意欲的に応えようとする一つの方法論的試みであると私は考える。

2 本書の特徴

本書の特徴の一つを挙げるとしたら、私はまず読者にやさしい本であることを指摘したい。それは、本書の問題意識や全体構図、核心的な問題について言葉を選びながら繰り返し述べていることから理解できる。言い換えれば、「仏教とケア」というテーマは、それほど誤解や偏見をもたれやすいということでもあろう。以下に、本書の目次を示す。

【本書の目次】

- 序 章 仏教とケアとの関わり
- 第一章 ヒューマニズムに基づくケアを超えて
- 第二章 先行する仏教的ケア論の検証
- 第三章 ケアする人の精神的態度—慈悲—
- 第四章 ケアする人の自己変容—仏性—
- 第五章 ケアの関係性はどのように深まるのか—縁起—
- 第六章 ケアの関係性にはたらく生成力—聞法—

補 論 ケアの関係性が死の向こう側に開かれること

第七章 死の向こう側に開かれることの意義—浄土—

第八章 死者に向けられるケア—回向供養—

第九章 死者との実存協同—還相の菩薩—

終 章 仏教思想に基づくケア論から見えてくること

上記「序章」の「V. 本書の構成と各章の相互関連について」には、全体構図について一目で理解できるように、表（チャート）にしている (p.22)。第一章から第九章までの要旨を簡略的に述べた上で、まとめたものである。表には、(左側より) 第三章から第九章までの各章に仏教概念を順次七つ配当し、それに対応させたケアの展開について記載している。さらに展開の契機として「自己変容」「関係性」「実存協同」の三つに集約し、最後に(表の右側に) この三つの契機を循環の構造としてまとめている。これら七つの仏教概念(①慈悲、②仏性、③縁起、④聞法、⑤浄土、⑥回向供養、⑦還相の菩薩)がケアの問題にどのように反映しているかを整理したものが三つの構造的契機(①自己変容、②関係性、③実存協同)である。以上の手順を踏まえて、著者は本書の核心的な課題が「仏教思想に基づいて超越の概念を再構築する」(p.286) ことにあると結んでいる。

3 読者への創意工夫—仏教用語の概念化—

さらに、「終章」の「II. 本書の全体構図—七つの仏教概念と三つの構造的契機—」(p.281) には、本書で述べた内容を再整理して、「III. 本書の核心的問題—超越の次元—」に展開すべく概念化を試みている。

たとえば第三章について、「序章」では「ケアする人の精神的態度を扱う」(p.19) として、当該章での課題と思索の方向性を簡易に記すのみである。これをうけて、「終章」では「慈悲」について、「ケアする人の精神的態度が

どのように表れるかを明らかにするための概念である」(p.281)と定義し、仏教用語である慈悲の概念化を試みている。この概念化により、読者の層を仏教関係者のみにとどめず、一般の読者にも理解できる創意工夫がなされている。さらに、仏教でいう慈悲を介することにより、見る者の視点を大きく転換している。通常のケアでは「ケアする人」を視点の基準にするが、慈悲を介することにより、その視野が超越の次元に開けることで、「ケアする人を媒介として超越の次元からはたき出てくる」(自ずからなる)精神的態度であることを実践的に示唆するのである。

以後、同様に第四章では「仏性」について、第五章では「縁起」について、さらに第六章では「聞法」について概念化しつつ順次展開していく。

なお上記の概念化について、注意しておきたいことがある。それは、なぜ概念化を試みるのかという点である。著者は「“宗教家が行うケア”につきまとう排他性をどう乗り越えるのか」(p.176)を問題にしているからである。

4 第六章「仏教カウンセリング」の位置づけ

著者は、第六章で仏教カウンセリングの理論について論じている。そして「この構図は、ケアの関係性の最も根源的なあり方を捉えている」(p.282)とする。この言葉からも推察できるように、本書の前半のまとめとしているようである。目次にも、第六章の後に「補論」を置き、以後、第七章より終章へと展開している。いわば、第六章が本書の前半の結びであるとともに、後半への入口(序論)となっているように読める。

著者は、西光義敏の仏教カウンセリングから多くの示唆をうけたようである。

西光義敏の仏教カウンセリングは以前より知っていたが、私にとって、スピリチュアルケアを理解する上での基礎となっ

たのは、まさに仏教カウンセリングの二重関係構図であった。これによって仏教とケアとの結びつきを構造化することができ、仏教思想に基づくケア論の方向性を確立することができた(p.277)。

とりわけ仏教カウンセリングの二重関係構図(p.168)への注目、仏教の立場よりスピリチュアルケアを探究する著者にとって「超越の次元への視座」(p.164)となったようである。この二重関係構図の底辺にある超越の次元について、本書の文脈では「関係性にはたらく生成力」(p.157)の機能として、カウンセリング場面でのカウンセラーとクライアントの進むべき方向を見定めていると指摘する。

このような視座より、著者は「II. ブーバーとロジャーズの対談」を詳細に検討している。引用意図は、ブーバーの真意は「ヒューマニズムに基づくケアの考え方に対する根本的な疑義」(p.164)にあるとして、ロジャーズを含むヒューマニズムに基づくケアへの異議を示すとともに、ブーバーの「確証(真理)の概念」を明確にするためである。さらに、ブーバーの確証(真理)概念と西光の二重関係構図に示された聞法概念の近似性をもって、両者の融合を目指している。

5 本書の核心的課題

—第九章「死者との実存協同」—

第七章では「浄土」について、第八章では「回向供養」について概念化を試みる。そして第九章では「還相の菩薩」について、「死者が生者と実存協同して生者を覚醒へと導き、さらに生者の覚醒はリレーションして次世代を生きる者の覚醒を呼び起こす、そのような死者から生者に向けた慈悲のはたきを具現化した概念」と概念化を試み順次展開する。

本書の主題は、「死者との実存協同」と言っても過言ではないだろう。その主題につい

てまとめられているのが第九章である。第九章では、京都学派の田辺元の思想を解明する。「この田辺晩年の『死の哲学』の内実こそ、『死者との実存協同』の思想にほかならない」(p.244)とし、詳細な作業を通して、仏教思想がケア論として展開することを示唆している。その具体的な作業は“喪の作業”として、そのままグリーフ・ケアのあり方となる。グリーフ・ケアは、死者と生者との関係において成立する。したがって、グリーフ・ケアの展開とは〈他者が自己をケアする〉〈自己が自己をケアする〉に加えて、「死者との実存協同」では〈死者が生者をケアする〉が含まれると示唆するのである (p.257)。

6 むすび

本書の感想について、愚見を述べさせていただく。私も仏教を学び実践する僧侶であり、少しくロジャーズのPCAに学ばせていただく立場である。その意味で、著者の立場と重なるところがある。上述したように、本書は読むたびに著者の読者に対する配慮と、創意工夫に驚かされる。また現代におけるスピリチュアルケアを仏教思想の立場から捉えなおす意欲的な試みであることも指摘しておきたい。

一方、一読者として問いかけたくなる点もある。以下、二、三点を挙げることにする。

まず、藤田清の仏教カウンセリングに対する理解についてである。著者は藤田を評して、次のように述べている。

藤田の提唱した仏教カウンセリングは、カウンセラー・クライアント関係の否定構造に着目した点で評価できるとはいえ、その人間洞察においては物足りなさを感じさせる (p.155)。

本書全体からみれば、1 頁程度の極めて限られた記述である。上記の「否定」(構造)であるが、本書には上記以外の言及はみられない。しかし、著者のこの用法について、私

は決して小さな問題とは考えられない。次の二点、すなわち本書の主題に関わる問題であり、加えて、本書の「序章」で著者が述べた「考察のための三つの論点」(p.15)の中、「(1)ケアする人」と「(2)ケアの場」に関連する問題であると考ええる。そこで原著を確認したい。

著者も引用している藤田の『佛教カウンセリング』(誠信書房, 1964)には、以下の通り記されている。

第二に方法論のことになるが、相談仏教(仏教カウンセリングのこと)は縁起観の展開として否定的啓発法を考える。これはロジャーズの方法に対立するものではない。…(中略)…しかし仏教で否定的啓発をいう場合には、その方法論の基底に、(クライアントの)その苦悩はその我執から発するものであるということが考えられている。その我執の壁をやぶるために否定がはたらくとも考えられよう。…(中略)…ここで大切なことは否定的啓発法の否定の意味である。…(中略)…この場合あやまって否定を単なる理論的な矛盾をつく意味に解してならないことはいうまでもなからう。

さらに藤田は「否定的啓発」について、クライアントの悩みは「クライアントの中の光明(仏性)が、無明の壁を破ろうとして働きかけているところに起るもの」と定義している。

以上の藤田のことばを根拠としてみた場合、著者が述べる「否定」とはどのような意味なのか、もっと知りたく思う。藤田によれば、「否定」とはカウンセリング場面で生じている出来事であり、無明の壁を破ろうとはたらくクライアントの仏性を意味する。著者のことばを借りれば、「超越の次元」がカウンセリング場面にあられる場合のカウンセラー／ケアする人の「自己洞察」である。加えて、上記の仏教用語の概念化についても、藤田は半世紀前に行っていることが窺えるの

で、本書の先行研究の一つと考えられる。

次に、ロジャーズのカウンセリング理論に対する理解についてである。著者は第一章において、「ヒューマニズムに基づくケアの限界」（p.33）と題する通り、その弊害や限界について様々に論じている。ヒューマニズムに対して、冷淡な視点を持つ。確かにその視点には、考えさせられることが多い。しかし、その視点で、ロジャーズをみる。「その典型を、ロジャーズに見ることができる」（p.158）としている。そして「共感」「受容」「自己一致」「自己実現」等重要な用語を記載した上で、「およそ今日のケアのあり方全般を基礎づけている」とする。ところが、そのような用語の定義を確認するためのロジャーズの原著は、当該章の註には記載されていない。本書末尾の参考文献に1本掲載されているのみである。なぜ確認しないのか、私は知りたく思う。本書は、ヒューマニズム・ケアを「限界」と断じる側面がみられるが、優劣をつけることなく、比較し関係づけながらの論じ方が望まれる。

最後に、西光義敏の仏教（真宗）カウンセリング論に対する理解についてである。著者は西光について「ロジャーズの人間理解に限界を見出し」（p.167）とし、その「限界」の論証としてロジャーズの人間理解と仏教の人間観を比較する西光の文章を引用している。確かに西光は晩年、仏教とロジャーズを比較して論じることはあった。しかし、「限界」と断じる言葉は一度も聞いたことがなかった。それを裏付けるのは、著者も記しているように、「仏法に基づく人間尊重のアプローチ

チ=Dharma-based Person-centered Approach:DPA」（p.175）という名称である。もし、ロジャーズの理論が「限界」であるなら、PCAの文字は入れないはずであろう。また、西光のキーワードの一つ「聞法」は、ロジャーズのPCAとの実践的具体的な“出会い”があったからである。仏教がPCAに出会い、またPCAが仏教に出会うことによって新たに発見する、今、ここでの“にんげんの気づき”を何よりも大切にしたい。西光は「違い」を明確にすることはあっても、優劣を論じることはなかった。その意味で、著者が本書の中で一貫して用いる「限界」とはどのような意味なのか、私は知りたく思う。以上、カウンセリング、特に仏教カウンセリングの視点から愚見を述べさせていただいた。

なお、ケアの本質が「いのちの響き合い」であることを確認するとき、仏教とケアという二つの言葉は、「死者の発見を通して、私の中でつながることができた」と著者は結んでいる（p.309）。私は著者の執筆意図を尊重したい思いから、読者には「あとがき」（p.307）、「終章 仏教思想に基づくケア論から見えてくること」（p.274）のあたりから読まれることをお勧めしたい。

文 献

- 藤田清（1964）：『佛教カウンセリング』誠信書房 166-167。
 近藤章久（2004）：『〈こころ〉の軌跡—一禅・森田療法・精神分析・念仏—』春秋社 38。
 西光義敏（2005）：『育ち合う人間関係—真宗とカウンセリングの出会いと交流—』本願寺出版社。